



### I-OWA マンスリー・セミナー講演より

#### 老荘に学ぶリラックス投資術

講演: 岡本 和久、レポーター: 川元 由喜子

老子や荘子が生きたのは春秋から戦国時代、君主がどのように国を治めていくかというのが非常に大きなテーマで、多くの思想家が競い合って議論する百家争鳴の時代でした。国を治めるのと資産運用とは、実は非常に似た部分があります。金融資産のポートフォリオが自分の国、それを行政単位に分けて治めるように、資産クラスごとに分けて一番いい「長」を選ぶ。「長」は投資信託で、「民」に当たる銘柄をたくさん持っているというわけです。

老荘思想のいちばん基本にあるのは「道(タオ)」といって、宇宙という現象が出来あがる前からあった法則性、自然法、時空を超越したエネルギーのようなものだと私は理解しています。老子も荘子も、タオに沿った生き方こそ、我々が最もリラックスできるということを知ったのです。その教えの中から、投資にも生き方にも役に立ついくつかをご紹介します。



最初の教えは、「気宇壮大な視座を持つ」。胴体は何千里もある鵬が遥か南を目指し、9万里の高さを飛び続ける。地上では小さい動物たちが鵬を笑う。しかし、小さい世界に住む者には想像もつかぬ大きな世界がある。短い時間に囚われているものは、大きな時間の流れを想像もできない。この例え話は短期投資家と長期投資家を思わせます。

タオというのは固定したものではなく、常に変化しています。これはマーケットも一緒です。「これはこういうものだ」と定義づけると、もう次の瞬間には変わってしまう。常に変化してやまない中で、陰陽は巡っている。何かいいことがあれば、実はその中に悪いことがあり、悪いことが起これば、その中にはいいことが隠れている。株価の変動は、常に変化していて、同時に陰と陽がバランスしているという、タオの動きの本質を思わせます。



## 長期投資仲間通信「インベストライフ」

「本質を見よ」、そして「ノイズに超然とせよ」。これについては「木鶏たれ。」という例えがあります。闘鶏は、殺気立って相手を求めたりいきり立ったりする間はまだまだ。他の鶏がどんなに鳴いても動ぜず、まるで木彫の鶏であるかのようになれば、自然の徳が備わって、姿を見ただけでどんな鶏も逃げ出すでしょう。国内外の名だたる投資家は、株価や他の投資家の動きからは常に距離を置き、超然としてひたすら自分の信じる価値の本質を見て投資を行う。それはまさに「木鶏」の心境です。

そして、考えすぎではいけない。特に老子はこれを繰り返しています。「無為を為せば治まらざるなし。」要するに作為をなしちゃいけない。小賢しい知恵と欲望を捨てて、自然の流れにあったことをしていれば、おのずと物事はうまく行く。とにかくシンプルに考えなさい、という教えです。

講演ではこの後も、示唆に富んだ例え話とともに、老荘の教えが続きました。項目だけ以下に挙げますと、「区別せず、全体を見よ」、「急がない」、「無駄をしない」、「争わない」、「欲張らない」、「孤独な道を歩む」、「良き君主であれ」。いずれも投資に通じるものがあり、心に留めおきたい教えです。講演の最後には、リラックス投資の実践にあたって、具体的なアドバイスもいただきました。